

Title	おわりに
Author(s)	荒木, 徹; 廣田, 勇; 竹本, 修三
Citation	京大地球物理学研究の百年(II) (2010), 2: 151-151
Issue Date	2010-10-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/169874
Right	
Type	Book
Textversion	publisher

おわりに

人は、時代を背景とし環境に支配されて生きながら、環境に働きかけて新しい時代を作っていく。人と時代の絡み合いを知るの面白く、歴史学習の醍醐味とも言える。学問の世界でも、研究者が生きた時代とその環境を理解し、その中で学問が創られていく有様を知るのは興味深く、同時に、学問をさらに発展させる際の手がかりを与える。前編に続くこの「京大地球物理の百年(Ⅱ)」では、このような観点から興味を惹く記事が多くなっている。

京大地球物理学教室の創始者、志田順に関しては、前編の佐々・三木対談に述べられており、深発地震存在の提唱とその評価(島田)、火山研究所設立時の談話(須藤)についても書かれていたが、本編1章で再び取り上げられ、より身近に感じられるようになってきた。阿蘇での志田のモルタル塗りや阿武山における竈つくりの話(林)は、雲の上の偉い先生というイメージを、親しみやすい姿に変えるものであった。そう言えば、「風邪気味であった志田先生が体温計でなく大きな温度計を腋の下に入れて体温を測っておられた」と長谷川先生が笑いながら言っておられたことがあった。このような逸話も、志田の学問的態度と無関係ではない筈である。

本編では、前編に欠けていた海洋・陸水関係の記述を補強した。これにより、野満の業績と人柄(高橋)が明らかとなり、速水の思想とその影響力の大きさが実感され(鳥羽・奥西)、現在までの海洋物理学研究室の歴史と出身者の活躍が理解できるようになった。

若い時代を地球物理学教室で過ごし、京大外で活躍中の4人の方にも超多忙の中を無理にお願いして書いて頂いた。いずれも世界の第一線で立派な業績を挙げておられる方々なので、その研究の軌跡を知るとは、今の若い研究者にとって有益であると思われる。自分の専門の狭い範囲に興味を限るのが若い人の傾向のようであり、一般に歴史への関心も低いと思われるが、身近に存在する立派な先輩の生き方から多くを学び取ってほしい。

地球物理の特色である海外観測・南極観測についても、関係者に思いを語って頂いた。中でも、第1次南極観測に最年少隊員として参加された北村氏の話は、人と出来事の絡み合いを述べていて興味深い。

観測装置製作に重要であった工場の役割と、理学部の中でも早かったと言われる通信ネットワーク化への対応についても書いて頂いた。このような環境整備への地味な努力も忘れてはならないと思う。「京大教養部地学実験の果たした役割(住友)」は、教養部教育の重要性を理解させる。

歴史記録ではプラス面が強調されがちであるが、批判的な分析も必要である。その観点から、「京大の地震予知研究(住友)」と「自由の学風」という幻想(廣田)は、刺激的で示唆に富む。これらに対する多方面からの議論が巻き起こることを期待したい。世話人としては、集録(Ⅲ)を刊行することも視野に入れている。

資料保存については、昨年(2019年)の第1回研究会の総合討論でも議論されている(前編、30-32頁)。歴史の発掘は過去の記録に頼らざるを得ないが、その記録が消滅しつつあるのが気になる。それを防ぐために、地物図書室に歴史書架を設け、そこに資料を蓄積することが必要ではないだろうか。昨年の建物移転で可成りの資料が破棄されたらしいが、各研究室で歴史資料が残っていないか再点検して、発見されれば、この歴史書架に移して公開してほしい。

この集録(Ⅱ)を読んで更なる議論や資料の発掘が続くことを期待している。これまでの議論とは異なる視点からの原稿や、新たな歴史資料が揃えば、世話人として集録(Ⅲ)の刊行への労は厭わない。これまでの関係各位のご支援に感謝するとともに、引き続きご協力をお願いしたい。

2010年10月10日

(編集世話人：荒木徹、廣田勇、竹本修三)